

## 古典文法トレーニング 長文課題 品詞分解と現代語訳

大問十九（出典：『宇治拾遺物語』）

◎品詞分解（名詞は基本的に非表示。非活用語は基本的に初出のみ。同色の助詞は同内容を示す。）

今は昔、貫之係助が土佐守格助になりて下りてある程格助に、任果て格助の年、七つ八つばかりの子格助の、えもいは副ずをかしげなるを、限りなくかなしうしけるが、とかくわづらひて失せに格助ければ、泣き惑ひて、病づくカ四・用ばかり思ひ焦がる程格助に、月比ラ四・用になりぬれば、かくて副のみあるべき係助（※1）事は、上りなラ四・用んと思ふ係助に、  
「児格助のここに何とありしはや」など思ひ出でられて、いみじう悲しかりければ、柱カ四・用に書きつけける。  
都へと思ふ格助につけて悲しきは帰らぬ人のあればなりけり格助

※1：「可能」ないし「適当」で訳するのがよい。「さのみあるべきならねば（そのようにはかりしてもらえないので）」などの形でも用いられるので覚えておきたい。

### ◎現代語訳（『ステップアップノート30 古典文法トレーニング』参照）

今となつては昔のことだが、貫之が土佐守になって（土佐に）下っていたときに、任期満了の年に、七つか八つほどの年齢で、言いようもなくかわいらしい子を、このうえもなく可愛がつっていたが、あれこれと（その子が）患つて亡くなってしまったので、（貫之は）泣き取り乱して、病気になるほど思い焦がれているうちに、数ヶ月来になつてしまったので、「こうしてばかりいるわけにはいかない。（京へ）上ろう」と思うけれども、「子供がここでこんなことをしていたなあ」などと自然と思ひ出されて、大変悲しかったので、柱に書きつけた。

都へ帰らなくて、と思うたびに悲しくなるのは、自分とともに帰らない人（＝子供）がいるからだなあ。